Kyoto Kougei Trip | issue KIYOMIZU・SENNYUJI

CRAFT POINT KYOTO

京都工芸地図

清水・泉涌寺 ISSUE

京都には土がない、

というのは、焼き物関係者の間では有名な話。実際に京都の陶土は江戸時代から不足しており、今では焼き物の多くが他産地の土から成る。一方で、京都の焼き物にはいつの時代も巧みで斬新であることが求められ、それに応えるべく職人は各地の土や技法を用いて腕を磨いてきた。それを知った上で産地を巡れば、自ずと京都らしさが見えてくる。

窯元の多い東山山麓のなかでも、代表的なのが清水と泉涌寺。2つの町は対照的だ。五条から清水寺へ続く坂を登れば、清水焼発祥の地と言われる五条坂や茶わん坂を中心に窯元や陶器店が点在する。最近では多くの窯元が店舗をもち陶芸体験を行っているので、作り手と触れ合う機会も多い。そこから3kmほど南下すると泉涌寺に着くが、ここは約100年前に清水から職人が移り陶芸が発達した地。東福寺から泉涌寺までの間は一見静かな住宅街だが、実は多数の陶芸家が自宅兼工房で作陶を行なっている。だからここでは、工房の中や軒下が売り場に代わり、街全体が“オープンファクトリー”になる秋の陶器市が一段と楽しい。

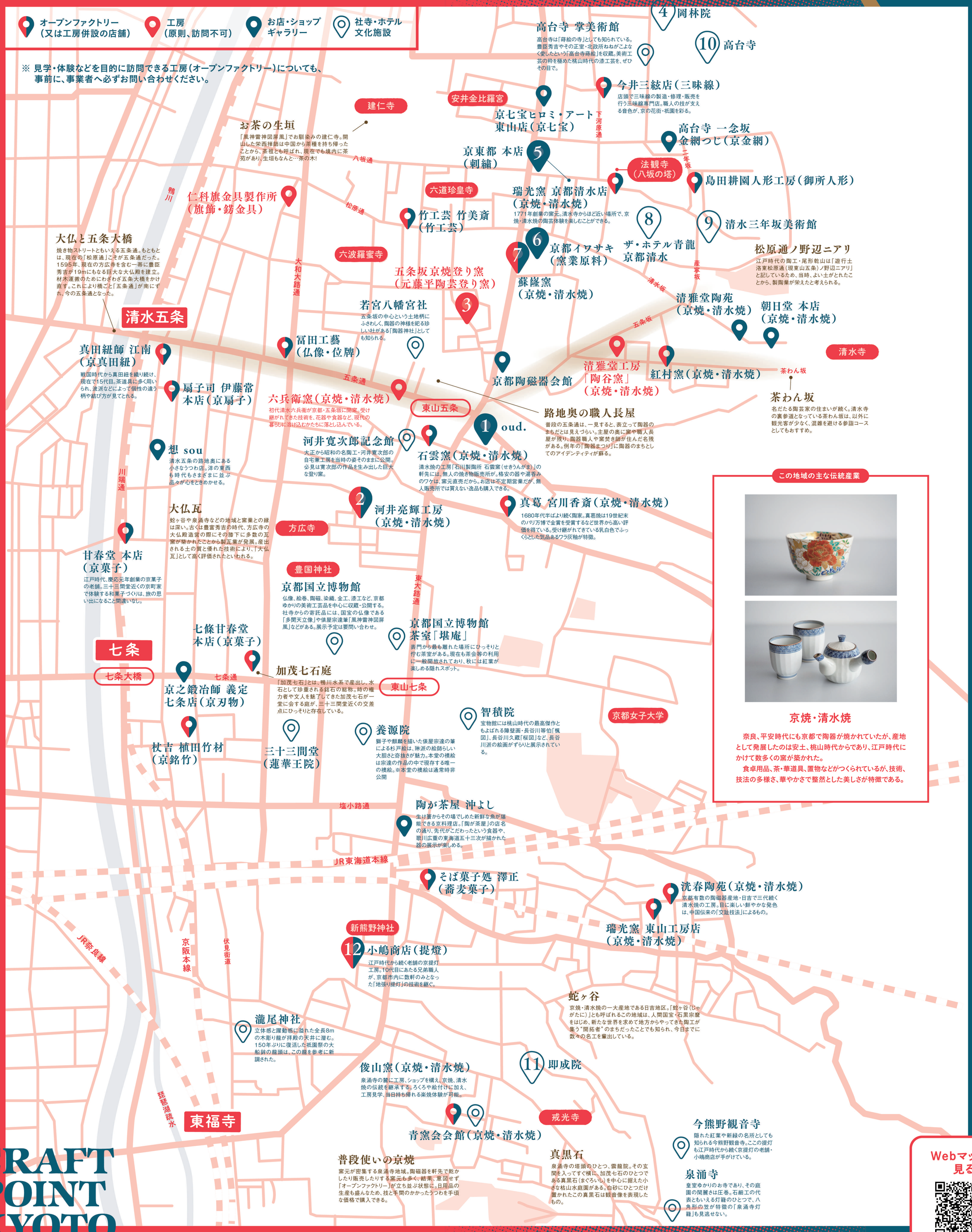
一帯は四季折々の景色が美しく古刹も多い。そんな環境は、職人の感性にも大いに影響していることだろう。

京都の伝統産業 Traditional Industries of Kyoto

@densannohi

京都伝統産業ミュージアム Kyoto Museum of Crafts and Design

主催：京都市、京都伝統産業ミュージアム（株式会社 京都産業振興センター） https://kmtc.jp/



京焼・清水焼

奈良、平安時代にも京都で陶器が焼かれていたが、産地として発展したのは安土、桃山時代からであり、江戸時代にかけて数多くの窯が築かれた。

食卓用品、茶・華道具、置物などがつくられているが、技術、技法の多様さ、華やかさで整然とした美しさが特徴である。

京都工芸地図 | Kyoto Kougei Trip | issue KIYOMIZU・SENNUJI

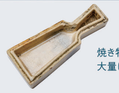
CRAFT POINT KYOTO

Webマップを見る

01 清水焼の工房跡にできた道具店。残されていた型や窯道具から新たな器をつくる。

2020年10月、東山五条交差点の南東にニュースポットが誕生した。細い路地のどんつきに現れる「oud.（ウード）」。錆びた波板から古さを感じさせる建物は、実は大正時代に建てられた清水焼きの工房だ。小上がりのようになったろくろ場、作陶に使う水を溜めておいた「用水」、釉薬を入れていた陶製の瓶、窯焼きの煤で黒くなった天井など、その形跡があちこちに残る。店主の岡部成幸さんがこの建物を見つけた時は30年以上使われていない状態だった。「窯道具やよく分からない部品や材料が散乱していましたね。そこに飾ってある動物型の焼き物も、地面からなぜか大量に出てきたものです。」そんな時代を物語る建物の良さを生かしたい、という想いをもっていた大家さんと岡部さんはたちまち意気投合。そこに賛同する設計士や大工さんが集まり、「必要最低限だけ手を加える」改修がプロジェクトとして行われたんだそう（ブログでは改修の工程を写真付きで発信されている）。

清水焼をはじめ国内の作家ものの器に、国内の古家具やフランスのヴィンテージ雑貨、カンボジアの籠など、セレクトは国も時代もボーダレスながら、どれも人の手が感じられる点で共通している。前職で長年勤務した家具屋が五条坂にあるという岡部さんは、土地への想いも強い。焼き物の産地として全盛期のような賑わいはないが「この場を通して、清水焼の文化を未来につないでいけたら」と前向きだ。その第一弾とも言えるのが、陶芸家の岡野里香さんがここにあった焼き型を使って作った「大正鉢」だ。岡野さんが目指すのは、ただ器を売るだけじゃない店。新旧の化学反応がどう起こっていくのか、これからが楽しみだ。



焼き物の型。こうした型が大量に残っていたそう。

長野県で作陶する陶芸家、岡野里香さんの「大正鉢」。改修前の工房を訪れた岡野さんがインスピレーションを受け、型を持ち帰ったことで生まれた。

oud.
☎ 090-9053-9232
東山区慈法院廻町588-9
11:00〜18:00（水曜休）

02 五条に河井寛次郎の流れを汲む陶芸家の工房あり。

祖父の代から作陶を行ってきた自宅兼工房。ここで成型したものを、亀岡にある登り窯やガス窯で焼き上げる。

河井寛次郎といえば、民芸運動を牽引した陶芸家。そのルーツを汲んだ陶芸家が五条にいるというなら、民芸好きでなくとも気になるはずだ。河井寛次郎の甥、河井武一を初代とする「南丹窯」だ。民芸がもつぬくもりと実用性を両立した独自の"京焼民窯"を作風とする…というと、そのルーツからして強い思想を感じるかもしれない。けれど、「スタイルとか意識したことはないですね。自分が作りたいものを作ってるだけなんで」と3代目の河井亮輝さんは、清々しいほどにあっけらかんとしている。ただ、生まれた時から食卓には祖父や父親が作陶した作品が並んだというから、その用の美は身体に染み込んでいる。

祖父の代に河井寛次郎を追って島根から出てきてから、河井家は3代に渡りこの地域で作陶を続けてきた。小さな町内だが今も数件の陶工さんがいるという。急遽必要になった道具を貸してもらうために走りに行くこともある。亮輝さんの幼少時までは近所に登り窯があり、そこで作業する父親にお弁当を持って行った思い出もある。「焼成前の器を乗っけた桟板（さんいた）を担いだ陶工さんが、町のあちこちから集まってくる。窯焚きさん（登り窯の技師）にお願いして焼いてもらうんですが、京焼は繊細な染付なんかもあったり技法はさまざまですから、それらすべてを一緒くたに焼くので焼き加減が難しいと言われていました」。

よくある質問「民芸運動に対する想いは？」には、「わかりませんねぇ。」と答えるのが常。「親から小難しいことを言われたこともないし、技術指導をされたこともない。民芸って大層なものではなく、個々の生活そのもの。今思えばね、そういうのが民芸運動だったのかなと思いますね」。

左から祖父の河井武一さん、父親の河井透さん、河井亮輝さん作。

窯の中の温度を測るための道具、ゼーゲルコーン。

2 河井亮輝工房
☎ 非公開　10:00〜17:00（日祝休）
工房見学・体験あり（有料）

03 知っているようで、よく分からない？京焼・清水焼ってなんだ？

「京焼・清水焼」と称される焼き物のスタイルは様々で、その定義はわかりにくい。簡単に言うと、京焼とは京都の焼き物の総称。その京焼のひとつである清水焼は、かつて陶工が集まった五条坂を原点に広がっていった焼き物のことを指すが、現在は京都で作られる焼き物全般が京焼・清水焼と呼ばれている。

京焼のルーツは平安時代に遡るが、広がりをみせたのは茶の湯が流行した江戸初期。公家や武家、また寺社仏閣や有力商家が求める高級品として、東山山麓地域を中心に栄えていった。土地柄、日本中から優れた職人や材料が集まり、多数の逸品が誕生した。明治になると、多くの公家や武家が京都を離れ、陶磁器産業は顧客を失い大ピンチに。そこで陶磁器の学校を設立したり、海外への販路を開拓するなど、職人は新たな道を模索した。大正・昭和には陶磁器は芸術の世界にも広まっていく。こうして時代に沿ってしなやかに進化してきたのが現在の京焼・清水焼の姿なのだ。

谷口哲也・作（陶泉窯）

工芸的視点で見た清水・泉涌寺の歩き方

このエリアに関わりのある方に、工芸という観点から見ておすすめの 場所 ヒト モノ を聞いてみました。

4 岡林院（こうりんいん）

豊臣秀吉と北政所（ねね）ゆかりの高台寺の塔頭寺院。現存する高台寺塔頭のなかでは最も古いものだそうです。苔の美しい露地庭園や茶室「忘知席」など、至る所に工芸の息遣いを感じることができ、心が落ち着きます。通常は非公開なので、次の特別拝観が楽しみです。

5 京東都 本店

京都の刺繍工房が、新しい文化継承のかたち・刺繍の可能性を考え発信する刺繍ブランドのお店。縄文土器や土偶などを象った「縄文シリーズ」をはじめ、刺繍の技術を通して、様々な切り口で魅力的な作品や企画展を展開されています。訪れるたびにワクワクする空間です。

6 京都イワサキ

窯業原料各種を扱う窯材店さんです。うちから3軒隣ということもあり、20年以上のお付き合いになります。関西近郊の陶芸関係者や海外の方も買いに来られるようなお店ですが、こうしたお店が ご近所にあるのもこのエリアならではの魅力に思います。

7 陶芸作家 涌波まどかさん

福岡で14代続く小石原焼の窯元出身。京焼青磁の作家、滿波顕臻のもとに縋いたのを機に、夫と共に異なる窯業産地の技術を融合した蘇臻窯を立ち上げる。京都市「未来の名匠」認定。

8 ザ・ホテル青龍 京都清水

昭和8年建築の元清水小学校を保存・活用したホテルです。ご縁を頂きアートのお手伝いをさせていただきました。日本の色を世界中の方に知っていただこうと「染司よしおか」さんへ制作依頼した植物染めの本棚は自然の風合いが柔らかく、目にも優しい空間となりました。

9 清水三年坂美術館

幕末、明治の日本の工芸品を中心に展示する美術館。幕末、明治にかけては、工芸の職人も時代に翻弄されたのは同じでありました。そんな時代のなか、職人の魂とプライドを捨てずに挑戦した彼らの作品を見ると気持ちが引き締まります。ふと立ち止まった時に足を運びます。

10 高台寺

実家近くにあるため大変昔から馴染み深い場所です。工芸・骨董の世界で育った私の原点でもあります。先日も高台寺蒔絵の展覧会へ参りましたが素晴らしかったです。今の時代を京都に生きる私達こそが、こうした文化芸術を今一度見直さなければと切に思います。

11 即成院（そくじょういん）

立派な正門と広々とした境内が素晴らしい、真言宗泉涌寺派の寺院です。同級生が副住職を務めていて、小嶋商店の提灯を使っていただいています。本堂内陣の本尊の阿弥陀如来と二十五菩薩（1094年建造）は重要文化財にもなっています。

12 京提灯職人 小嶋諒さん

江戸寛政年間創業、京提灯の製造・販売を行なう小嶋商店の10代目。正統派の京提灯を作りながら、提灯の新たな可能性を求め、既存の概念にとらわれない提灯の在り方を提案している。

04 50年前から時は止まったまま。操業当時のまま残る市内最大級の登り窯。

1909年建造。全長19m（煙突の部分含め）、全幅5.5m全高6m。胴木間（一番手前の燃焼室）と9つの焼成室から成り、焼成室全体の容積は102 m³に及ぶ。

写真撮影：南部裕樹

京都東山山麓は焼き物の産地だが、今の街にはそのシンボルである登り窯の姿は見られない。昭和30年代までは五条坂や泉涌寺、また粟田口、日吉などで合わせて数十基の登り窯が操業していたが、戦後の混乱に加えて大気汚染防止法（1968年）や京都府公害防止条例（1971年）が施行されると電気窯への移行が進み、多くが閉鎖された。そんな激動の時代を"生き延びた"のが五条坂京焼登り窯（元藤平陶芸登り窯）だ。

操業自体は1968年に終了したが、内部には焼成前の器が並んだままで、ほんの前日まで稼働していたかのよう。またそのスケールは、市内に現存する登り窯のなかでも最大規模。この地が製陶業に沸いた時代の空気をぜひ肌で感じてほしい…と言いたいところだが、現在は一般公開を行なっていない。

合成写真撮影：佐野春仁

3 五条坂京焼登り窯（元藤平陶芸登り窯）
☎ 075-222-3791（京都市教育委員会）
東山区六波羅裏門通東入竹村町151-1他　一般非公開

05 夏の五条坂。秋の泉涌寺。二大陶器市から街の歴史が見えてくる？

京都市内の陶器市といえば、夏の「五条坂陶器まつり」と秋の「窯元もみじまつり」。前者は五条坂で毎年お盆の頃に開かれるが、これは大正初期に近くの大谷本廟へのお墓参りや六道珍皇寺への六道まいり（亡くなった精霊をお迎えする）に来る人びとに半端物等を売り始めたのが発端とか。現在は五条坂の両側に約400軒の店が並び、京焼・清水焼をはじめ各地の焼き物や、若手の陶芸家の出店も多い。後者は東福寺・泉涌寺周辺で、毎年紅葉が見頃を迎える頃に開催。一帯は泉涌寺窯と呼ばれ、約100年前に五条坂から焼き物が伝わり、今では50超の窯元や陶芸家が作陶する。店舗を持たない自宅兼工房が多いので、軒先に作品が並ぶこの間は、制作現場を間近に感じられる貴重な機会。普段は目に見えない陶器の街としての歴史や文化が見えてくるのが、京都の陶器市なのだ。

五条坂陶器まつり

☎ 075-541-1192（五条坂陶器祭運営協議会）
東山区五条坂一帯　毎年8月7日〜8月10日の9:00〜22:00（毎年同日）　※2022年の開催は未定

窯元もみじまつり

☎ 075-531-5678（京都青窯会協同組合）
東山区泉涌寺東林町一帯（東福寺と泉涌寺の間）　毎年11月中下旬の4日間　※2022年の開催は未定

編集：池尾 優、竹内 厚、bank to　デザイン：筑田真維（bank to）　撮影：津久井珠美